

「神は生きている者の神」

—マタイによる福音書講解説教 91—

詩篇
マタイによる福音書

第90篇 1節～6節
第22章 23節～33節

説教 岡村 恒牧師

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」。(マタイによる福音書 第22章32節)今朝与えられた御言葉は神の国の話です。私たちは永遠の命について、復活について、主イエスが何を約束くださったかを知ることになります。

今日の箇所、主イエスを試みようとした人人が登場します。復活ということはない、そう主張してきたサドカイ人でした。復活のことを考えるよりは、地上で律法を守ることが神の祝福につながると確信していました。ユダヤ教の一派であり、聖書の中から理解できることだけ受け入れて思い違いをしていた人々です。

私たちは日曜日に礼拝をしています。日曜日の朝、主イエスが復活されたからです。主は今も生きておられ、やがて来てくださる。死人の復活ということは私たちの信仰の核心部分です。

十字架に磔にされて「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイによる福音書 第27章46節)と絶望の叫びをあげ、地上の旅を終えた主イエスの死の様が、私たちの死と重なると聖書は言います。

今、受難節を歩んでいます。滅ぶべきこの私に永遠の命を与えるために、主イエスがお苦しみになったことを心に刻みながら、自分自身の罪の重さに心打たれながら歩んでいます。私たちの死の姿がキリストの死と重なるのなら、私たちの復活の様も等しくなる。これが私たちの教会の信仰です。

死ぬ必要のないお方が十字架の上で死んだ。それはあなたのためだと聖書は言います。神に逆らい、神なしに生きようとし、神の招きを拒み続けるあなたは、神の裁きを受けて滅びるはずである。しかし神は、主イエスを地上に送り、滅ぶべき体を持った人間として生まれさせ、私たちに変わって、あの十字架に磔にして、私たちのための犠牲にしてくださった。

キリストの死の様に等しいというのは、主イエスの死を、自分自身の死として受け入れるという話です。私たちは洗礼式で一度死んで葬られます。しかし3日目の朝、主イエスが復活されたので、あの洗礼式において私たちは復活して、新しい命を生きる者として歩み始めます。

死はこの地上の一切から私たちを断ち切りま

す。死において私たちは一切を神の手に委ねます。洗礼を受け、永遠の命を得て眠りに就いた者には、何一つ欠けたものはありません。なお地上を歩む私たちにも主が羊飼いと信じるとき、私には何一つ欠けたものはないのです。眠りについた兄弟姉妹たちが、やがて終わりの日、神の前に立つ。それは私たちの想像、期待をはるかに超えた豊かな現実として起こります。

主イエスに「友よ」、「兄弟よ」と呼びかけられる時、神の国の食卓が用意され、その計り知れない喜びの時には、もはや地上で持っていた絆や喜びは色を失っていくのだと思います。もちろん主イエスは、1人1人の名を呼んで、墓から引き上げてくださいます。しかし、その時、私たちの姿はキリストの栄光と等しい姿に変えられると約束されています。サドカイ人たちが誤解していたように、様々なしがらみを神の国に持ち込む必要はありません。ただひたすら、神の栄光を喜び、褒めたたえ、神の国の食卓を味わう。そういう終わりの日を私たちは待ち望めば良いのです。

地上を歩む間、私たちは多くの悲しみや困難に遭遇します。愛する者との別れに直面して、言い尽くせない寂しさを覚えます。しかし私たちは知っています。終わりの日、主イエスが再び来られる日、私たちの目から主はすべての涙をぬぐい取ってくださいます。死も叫びも悲しみもない本当の平安と喜び、神を褒めたたえる歓喜の時が来るのです。主イエスを信じて、主の死に等しくされたことを感謝し、やがて終わりの日、栄光の姿に変えられる時を待つのです。

死の眠りについた者は神の手の内にあります。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」。と主が言われたのは、死の眠りに就いた者にとっても、神はまさに命の神であることを言い表したものです。

復活をされた主イエスが今も生きて私たちのために場所を用意しておられる。この聖書が語る真実が、私たちの地上の旅を支えて下さいます。終わりの日、地上では味わうことのなかった深い結びつきを、私たちはついに味わうことになります。聖書に記された復活の約束は確実です。私たちは、その確実な約束を握って、今日もまた主を褒めたたえ、新しく歩み出します。

(記 説教要約奉仕者)